

# 英語を専攻とする学生たち全員の留学を目指して —環境整備の提言—

ライト・キャロリン

## はじめに

文部科学省は2008年に国際化拠点整備事業（いわゆるグローバル30）に取り組んだ。この事業は留学生の数を増加させる目的で実施され、2020年までに毎年30万人が日本に留学できるように、その留学生たちを受け入れる30校の「コア」大学の研究や教育関係を整備するとしている。国際的水準に達した教育の質を保証するため、英語のみのプログラムを導入する予定である。5年以内に学部レベルで33課程と大学院レベルで124課程を設置することが目標とされている。ただし、グローバル30事業の根本的概念となる「グローバル化＝英語化」という認識に対する疑問があるが、それについては本論後半で述べたい。

身近なところでは、グローバル30に選ばれた13校の大学のうち3校（京都大学、立命館大学、同志社大学）が京都市にあり、京都市の活性化政策のひとつとして京都の大学の国際化に向けた人材育成や国際交流・国際協力を推進する流れが出来ている。京都光華女子大学・短期大学部（以下本学）もこの流れ一端を担うべきであろう。

上記の背景には国際化およびグローバル化を目指す政治的な動向が確実にあり、たくさんの大学が日本人学生を留学に送り出したいとしている。たとえば、（グローバル30に選ばれた）早稲田大学では、2009年度に843人の学生が長期留学し、609人が短期研修・語学研修に留学したが、中長期的にグローバル化を推進し、最終的に年間総数2000人の留学を目指す<sup>1</sup>。留学は学生にとってメ

リットがいくつかあると考えられる。現地で文化的背景、生活様式、考え方などを体験しながら言語を習得できる。そして、自分の考え方や価値観、教室では得ることのできない体験を通じて成長し、自立する。それに加え、経済のグローバル化に伴い就職に有利な経験ともなる。

本学には、2010年8月現在アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリアと、英語圏を中心に協定校が6つある。学生たちに長期留学（1年間）、セメスター留学（半年）、またはワークスタディアブロード（WSA、インターンシップを含む4週間または6週間の短期留学）、そしてその他に短期語学研修プログラムをいくつか提供している。原則として全学科の学生が全てのプログラムを利用できるが、実際には英語を専攻する学生が圧倒的に多い。短期研修に参加することには特に条件はないが、長期留学やセメスター留学をするためには、必修科目を順調に取得し、受講態度が良く、海外で学ぶのに十分な英語能力がある者を、所属学科が推薦することも必要とされる。近年では毎年5人前後が長期およびセメスター留学をし、10人前後が短期研修に参加している。

本学の英語英米文学科および国際英語学科では、留学を必修にすることを長時間にわたり議論したが、学生の選択の自由や様々な生活事情を考えたうえで、強制的に留学させるよりは、本学国際交流センターの協力で、留学しやすいよう、期間・時期・学習レベルが異なった様々な留学プログラムを用意した。だが、実際に留学プログラムを利用した学生たちは少数にすぎない。

異文化に触れたり、生きている英語を学んだり、なじみの薄い環境で生活することは学生たちの成長のための望ましい刺激になるので、留学制度を発展させ、今後学生を一人でも多く留学させたい。そのため、現在の留学制度の問題点を探り、留学を体験しなかった理由を明確にする試みとして、2010年度の前期に4回生を対象のアンケート調査を実施した。

### 本学の留学制度の利用状況

2010年度の前期中に英語英米文学科の4回生の専門ゼミの担当者を通じて、

在学生の 52 人中 45 人から回答済みのアンケートを回収した。回答用紙は無記名であった。回答者中 14 人が本学の留学制度を利用し、全回答者の 31.1% にすぎないことが判明した。長期もしくは Semester 留学した割合はさらに低く、回答者の 17.8% である。

表 1 本学在学中に留学した 4 回生の人数

した (全回答者%)			しなかった
14 人 * (31.1%)			31 人 (68.9%)
長期留学	Semester 留学	短期研修	
4 人	4 人	7 人	

\* 一人は長期留学・短期研修と計 2 回留学した。

留学すると、学生たちにとって貴重な体験となる。「あなたが利用したプログラムについてご意見・ご感想を自由に書いてください。」という質問に対し肯定的なコメントが多数書かれており、筆者は留学の大切さを再度確認した。例として以下のコメントがあった。

- ・「とても勉強できてよかった。」
- ・「... 留学を通して現地で英語、その国の文化について学ぶことができとてもいい体験となりました。」
- ・「初めての海外で、すごく不安もありましたが、ホームステイ先も安心して快適に過ごせ、語学学校もしっかりしたサポートがあり、とても楽しく充実した留学生活を送る事ができました。」
- ・「... 2 年間のもあるといいなと思います。」

### 留学しなかった理由について

本学科の教育目標を達成するため、留学を学生たちに積極的に勧め、留学しやすい環境を整備したつもりであったが、実際には 3 分の 1 以下の在學生しか留学しなかった。これは学科にとって残念な実情であるので、理由を探りたく

思い、留学しなかった学生に「なぜ留学しなかったか」を尋ねた。複数回答可であったので、合計人数は回答者人数を上回る。19人が回答選択肢から1つだけ選び、8人が2つ、3人が3つ、そして1人が4つを選んだ。学生ニーズが多様であることを示す結果である。

表2 留学しなかった理由の割合

留学しなかった理由	人数 (留学しなかった%)	1つだけ選んだ場合の 人数
1. 興味がなかったから	3 (9.7%)	3
2. 条件を充たさなかったから	6 (19.4%)	2
3. 経済的理由	14 (45.2%)	5
4. 就職活動があったから	6 (19.4%)	1
5. 心の準備ができなかったから	11 (35.5%)	3
6. 介護のため	0 (0)	0
7. 体調不良	1 (0.03%)	0
8. その他	7 (22.6%)	5

「その他」の理由にさまざまな個人的な理由があったが、以下のような理由があげられた：

- ・「編入生なので時間的に余裕がなかった。」
- ・「視覚障がい者向けのプログラムがあれば参加したかもしれない。」
- ・「大学入学前に留学したから。」

「興味がなかったから」を留学しなかった理由として選んだ回答者はたった3人（全回答者の6.7%）であった。つまり、28人は留学に興味があったにもかかわらず行かなかった。関心があったのに留学しなかった理由は大きく分けると2つある：経済的理由と準備不足である。留学しなかった回答者14人（45.2%）が選んだ「経済的理由」は数値的には留学しなかった第1の理由となる。そして、11人（留学しなかった回答者の35.5%）が選んだ第2理由は、「心の準備ができなかったから」である。「日本を離れるのがイヤだったから」や「飛行機が怖いから」などのコメントが、心の準備ができていないことを表してい

る。「心の準備」以外に留学する準備不足を示す項目には、「条件を充たさなかったから」を理由にした6人（留学しなかった回答者の19.4%）がいた。つまり、留学することを積極的に考えたが、英語能力不足など、学内規定に定められている条件をクリアできなかったということだ。

留学は大学在学中にしないと、現実的に難しくなる。大多数の回答者(62.2%)は卒業してからの留学の予定は特にないと答えた。留学の経験者は「分からない」、「旅行したい」、「就職できなかったら、ハワイに行きたい」や「いい機会があれば」のような曖昧な表現で、可能性を残しているが、積極的に考えてはいないようである。

表3 「これから留学に行く予定ありますか。」という質問の回答

いいえ		はい、または可能性がある		わからない、または無回答	
経験者	無経験者	経験者	無経験者	経験者	無経験者
4	24	4	7	6	0

一方、将来の留学について、留学しなかった学生たちの一部が積極的に考えているようで、具体的に予定のある学生もいた：「卒業後、アメリカに留学する予定です」。その他に留学に対する憧れを感じるコメントがあった。

- ・「卒業後、3年ぐらい行きたいです」
- ・「できれば Working Holiday に行きたい」
- ・「イギリスかアメリカへ行って、ちゃんとした英語を身につけたい」

今後学生たちが大学時代に後悔のないような、留学しやすい環境を整えていきたいと考え、以下にいくつか提案する。

### 留学を増やす対策の提言

留学しなかった理由の、「体調不良」や「身内に不幸があり直前で行けなくなった」のような、どうしても大学が解決できない問題はわずかだろう。他は以下

のような対策で留学する学生の数を増やす余地はあると思われる。経済問題や学生の準備不足の解決法について以下に論じる。その他に、すべての学生に平等に留学の機会を与えるという観点から障がい者向けのプログラムを検討すべきだろうが、この問題については別の機会に考えたい。

## 1. 経済問題の解決方法

まず、経済的な理由について考えたい。本学に長期留学やセメスター留学のための奨学金制度が設置されている。本学の協定校に留学を認める場合、学生が留学中に支払う本学の学費と同じ金額を奨学金として本学が払い戻す。つまり、他大学と違って、本学の学費と留学先の大学の学費を同時に支払わなくてもいい、という学生・保護者にとって有利な状況である。本調査回答に学生から以下の嬉しいコメントがあった：「他の学校とは違い、単位認定や学費の面のサポートが充実していてとてもよかったです」。この事実を在學生に広く伝えるべきだろう。奨学金制度は充実してきているものの、全てはカバーしきれず、短期研修のための奨学金制度はない。優秀な学生のための奨励金を設置すれば、学生たちの勉学への刺激になり、留学の興味を高める手段にもなる。

しかし、経済不況の中で奨学金は留学を普及する絶対的な方法にはなりきれない。現在の留学先（カナダ、オーストラリア、イギリス、アメリカ）に関して、現地物価、協定校の学費、交通費にかなり差があり、経済的に困っている学生が選択肢の中からより安いところを選ぶことはできるが、それでも手を出せない家庭もある。欧米のみに留学先がある状況を考え直すべきであろう。その点について、アンケート回答に学生からコメントがあった：「(4回生の)夏休みの最後のチャンスだと思ったので、2ヵ月行きます。費用と語学学校の質からフィリピン・セブ島の学校を自分でエージェントを通して申し込んでいます」。この学生が気付いたように、アジアに留学すると、物価、学費、交通費が欧米より安くなる。フィリピン以外、シンガポール、マレーシアも留学先として考えられる。少数であるが、欧米の大学がアジアにキャンパスを設置しており、教育はすべて英語で行っている。たとえば、イギリスのノッティンガム大学が

マレーシアや中国にキャンパスを有し、イギリスにあるキャンパスと同レベルの教育が保証されている。欧米文化から切り離してアジアで英語を勉強することに対する違和感があるかもしれないが、留学する学生の英語能力の上達は十分期待できる。

## 2. 準備サポート対策

「心の準備ができなかったから」という理由で留学しなかった学生たちのために、一回生の専門ゼミなどを利用し、留学準備講座を提供すべきである。半期間で15回の授業が必要と考えられる。留学先の国々について紹介し、学生たちに調べさせ、協定校の具体的な様子を説明する。どこに行きたいか、学生たちに考えさせ、学生たちは留学する自分についてイメージを抱くようになる。そして、全員が参加する一週間程度の海外短期研修を実施する。教員が引率すれば、安心して準備講座で習得した知識を発揮できる。上に述べたように、わずかだったが留学に興味がないと答えた学生もいた。入学して早い段階から留学についての準備講座で勉強すれば、好奇心や興味が湧いてくる可能性もあるだろう。準備講座で奨学金の情報についても徹底できる。

授業に留学した先輩学生を招き、留学の様子を聞かせてもらう。留学中に出会った問題について話し合い、解決方法を考えさせ、問題が生じたときの必要な英語表現をロールプレイで練習させる。具体的に荷物として何を持っていけばよいかについても一緒に考えたら、不安感を減らすことが可能だろう。学生たちの精神的な不安が拭えない場合、必要に応じて、教員がオフィスアワーなどで学生個人の相談にのって、しっかり向き合わないといけない。

本学の現在の留学制度では、留学先を自由に選べるが、不安を抑えるために集団で全員を同じ留学先に送る大学がある。しかし、それは避けるべきである。例えば今回のアンケートに日本人同士で行ったから不満があると言う意見がよく見受けられた。例えば、「(日本人学生)と一緒に留学だったので安心でしたが、日本人ばかりで日本にいると変わらないのがよくないと思う。」そのうえ協定校の教員から、本学の学生たちが日本語を使いすぎであり、英語で頑

張ってほしいという注意をよくいただく。一方、集団でない場合、現地の人たちだけではなく、いろいろな国の人たちと一緒に勉強し、仲良くなれてよかった、との留学経験者からのコメントがある。

就職活動を心配した学生が6人(13.3%)いて、その中の一人が就職活動という理由だけで留学しなかった。就職状況が厳しい現在、大学側として真剣に受け止めるべき項目であろう。ただし、就職活動は3回生から始まるのが現状なので、一回生のときに留学準備講座を行い、2回生のときに留学すれば、就職活動に影響はない。このようにすれば、留学経験があることを雇用側に自己宣伝でき、就職に有利と思われる。

### 終わりに

今回のアンケート調査にあって留学しない理由が判明し、現在の本学の留学制度を使って留学する学生たちの割合を増加させる方法をいくつか提言した。

最後に関連するテーマの2つについて論じたい。一つ目は英語教育に関する課題である。「条件を充たさなかったから」留学しなかったという学生たちに、日常的に授業でしっかり英語能力を身につけさせ、客観的英語能力テストを実施し上達度を測るべきであろう。英語を習得する授業の他に、(国際英語専攻だけではなく)全学科で英語を使った授業をなるべく導入するべきだろう。それによって「英語を勉強する」より、英語を知識収集のための道具として使う練習ができる。そうすると、交換留学生や研修生を本学により招きやすくなる。グローバル30に選ばれた大学は大規模で、様々な課題を抱えている留学生個人々のニーズを見失いやすい環境であろうが、それと違って、本学は小規模でエンrollment・マネジメント制度で学生一人一人を大切にしている環境がきちんと整備されている。その上、本学園の伝統文化教育が特に欧米諸国からの留学生には魅力的環境である。

これからも英語教育と英語圏との交流を大切にすべきではあるが、英語圏に



とられず、広く様々な国に留学先を設定すべきだと思っている。はじめに述べたように、留学というのは学生の成長のきっかけとなるものであり、人生の財産にもなる。それは留学先が英語圏でなくても変わらない。周りのアジア諸国に留学先を設置すると、留学のコスト（生活費、交通費、学費）が減少でき、経済的理由で留学しない学生の数を減することができるだろう。世界情勢をみる限り、将来的にこれらアジア各国についての理解がますます必要になってくる。本学でも第2外国語として中国語・韓国語を提供している。22年度から韓国の大学との交流が始まって、本学の学生たちを短期文化研修のために韓国に送り出すことができた。これからもどんどん視野を広げて、学生たちの留学機会と海外留学生との交流機会を増やし、積極的に国際交流を推進したいと思っている。

